

## 大学院へ行こう

う蝕学分野 永田 量子

拙い文章ですが現在、大学院へ進学しようか迷っている皆さんの参考になれば幸いです。

私は学生時代から漠然と大学院への進学を考えておりましたが、どこの大学、どんな分野へ行こうかとはあまり考えていませんでした。大体どのようなことをするのか、研究とはなんぞや、そもそもできるのか、なんとかなるものなのかな等等、本当に無知で無計画でした。

そんな中、新潟大学の研修医になり自分の極めたいと思える分野がはっきりしてきました。また、医局説明会を受けて自分の極めていきたい分野が一番近かった現在の医局に入局させてもらいました。

正直、大学院進学を決めてからはかなり不安でした。もともと出身校では無い為、どんな先生がいるのか、医局の雰囲気はどのようなものなのか全く知らなかったからです。しかし、医局の先生がたは優しくアシストしてくれて、すぐに医局に慣れることができました。また、専門分野だからこそある特殊な器具の使用法などもだんだんと覚えていけました。研究も初めはよくわからなくて戸惑いでしたが、だんだんと形になって自分の力のみで対処していけるようになると楽しさも湧いてきました。

現在、私が行なっている研究は、ご存知の方もいるかと思いますが、ピロリ菌を扱ったものです。ピロリ菌は胃がんの原因というのはよく聞かかと思えます。歯医者とはピロリ菌になんのか関係があるのかと思えますよね。そのようなちょっとした疑問の答えが気になるような方は大学院生に向いているかもしれません。実はピロリ菌は口腔内にも存在している可能性があるのです。ピロリ菌の感染経路は未だははっきりしていませんが、ピロリ菌だけではなくこういう研究をしていると

なんとなくそのものの性質がわかってきて、周りに注意を促したりできますね。

また、ご時世的にPCRという言葉が報道で聞いたりしますが、これもどんなものかわかりますし実際研究で使います。報道内容に対して突っ込みを入れることも容易いですよ。

さて早いもので現在、私はう蝕学分野の大学院4年生になりました。研究も大詰めで論文投稿に向けて気合いを入れ直さねばと思うところです。この4年間大学院でしか体験できないことがたくさんありました。学会での発表はもちろん、医学部との共同研究や、企業や留学生との交流、学生さんへの実習指導など、4年間の大学院生活は長いと最初は考えていましたが、あっという間でした。

今、大学院へ興味を持っている人がいれば、私はお勧めしたいと思います。研究なんか難しそうでも自分には敷居が高いと考えている人もいるかもしれません。最初は確かに戸惑うこともあるかもしれませんが、それは当たり前です。人生においてやったことないことですから。しかし、続けてみると案外形になっていくものです。それに、他では得ることのできない人とのつながりや、知識を得ることができますよ。

人生は経験です。



令和元年12月撮影

# 大学院へ行こう

歯周診断・再建学分野 松 岸 葵

大学院4年の松岸葵と申します。大学院生活も終わりに差し掛かったところで、「大学院へ行こう」の原稿依頼を頂きましたので、自分の経験を交えてお伝えさせていただきます。

大学院進学を考えたのは少し早く、6年生で臨床研修先を決める時だったでしょうか。大学院を経験した父の勧めもあり、博士号を取得し、臨床技術も身につけてから歯科医師として社会で働きたいと考えていました。また、様々な科で臨床実習を行っていく中で、患者さんを診て長くお付き合いしていく歯周病科に興味を持ちました。そこで、当院の臨床研修で半年歯周病科の先生にお世話になり、その後も大学院で歯周診断・再建学分野を選択し、今に至ります。

と言いつつも、この時点では大学院のお仕事、特に「研究」についてイメージがぼんやりとしていたように思います。博士号を得るために必要なことではあるものの、果たして4年もやっていけるのかという不安がありました。しかし結果的に大学院のお仕事は大きく自分を成長させてくれたと思います。

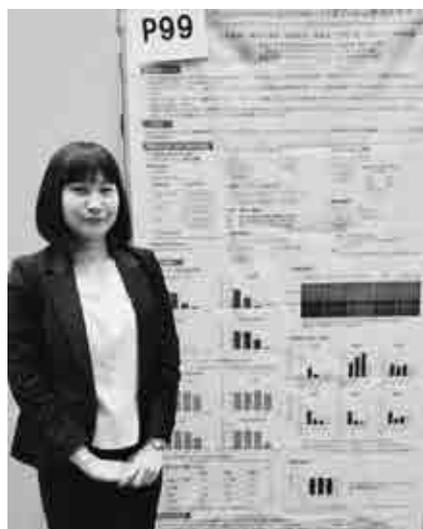
まず研究で理論的に考える力をトレーニングできます。もともと得意ではなかった分野ですが、自分の実験データを先生に説明し、理解が足りない部分を解説して頂くことで、少しずつ論理的思考ができるようになり始めました。すると臨床でも、「どうすればこのケースは良くなるか」など、習慣的に問題点と解決策を考え、さらに患者さんに分かりやすく説明ができるようになってきている、と実感しました。

また、並行して色々な仕事をできるようにもなったと思います。慣れてくると様々なプロジェクトを同時に担当させて頂きました。最初は毎日生きるのに必死でしたが、先生もそんな私の状態・進捗を見ながらアドバイスをして下さいまし

た。「クオリティを落とさず効率良く進めるにはどうしたら良いか？」と徐々に考えられるようになり、自分のキャパシティも少しずつ大きくなってきたように思います。

さらに大学院には沢山の先生、先輩方がいらっしゃるため色々な相談に乗って頂けますし、同期とは切磋琢磨することができます。最近では留学生の後輩ができました。最初は私のボキャブラリーが貧弱なあまり、コミュニケーションが難しかったのですが、英語力や教える力をつけることができました。教えることは難しいですが、何よりも自分の勉強になっていると感じます。

もちろん上手くいくことばかりではなく、実験で使う細菌の培養状態に振り回される、実験失敗する夢を見て夜中に起きるなどもありましたし、外の病院や開業医に行けば違う自分にもなれたのではないかと思います。ですが、自分にとって大学院は成長させてくれるとても良い場所でした。もし少しでも興味があれば、皆さんも大学院という選択肢はいかがでしょうか？進路決定は悩む所と思いますが、この話が皆さんの助けに少しでもなれば幸いです。



# 「大学院へ行こう」から「大学院にいます」

生体歯科補綴学 山本 悠

生体歯科補綴学分野大学院2年山本悠と申します。この度、大学院へ行こうというテーマで執筆させていただきます。ですが、現在、大学院生ですので、あえて「大学院にいます」もタイトルに付け加えました。

「親にできる治療をしているか」

私は、研修医で冠ブリッジ診療科に入局しました。入局の大きな理由となったのが、「親にできる治療をしているか」という言葉です。これは、私が歯学部5年生の時に、当分野教授の魚島先生が講義で話された言葉です。

講義室の、一番前の席で、前のめりに、講義に集中していた私は、「いいこと話しているな～」と生意気な感想と共に、臨床へ出ていないその時は、言葉の本質を理解できませんでした。(今もその本質を探究している最中ですし、ずっと探求すべきであるとも思います)

臨床実習で患者さんを治療する立場となり、少しその意味が分かってきました。そして、「親・家族・大切な人にしてあげられる・してあげた治療を学びたい」と考え、研修医で冠ブリッジ診療科へ入局し、もっと学びたいと考え、大学院へ進学しました。ですので、私の「大学院へ行こう」は親にできる治療を学びたい・その本質に近づきたい、というモチベーションのもとにあります。

大学院へ入学し、診療、研究、また同期、後輩、先輩、教員の先生方にも恵まれ、日々充実した日々を過ごしております。今年度は、コロナウイルス感染拡大により、外来縮小など、ある程度のまとまった時間を得ることが出来ました。これは、研究テーマを学ぶチャンスと考え、4月から英語論文を毎週1本読むことに決めました。ですが、どの論文を読むべきか、どのジャーナルがよ

いのか、誰が書いているのか、それに加えて、英単語が分からない、専門用語はもっとわからない、壁がたくさんありました。ただ、昔から、まずはやってみるとというのが、私のスタンスです。とりあえず、私の研究テーマに近いキーワードを検索して、読んでみるという生活を始めました。読んでいくうちに、例えばインプラント関連の論文であれば、「顎堤の骨吸収が進み、、、」や「咬合による機械的な、、、」など、毎回の流れが分かってきました。

というように、徐々に読めるようになってくると、(自分で始めておきながら)初めは苦と感じていた論文を読むことも、新たな学びを得られるという「わくわく」感が勝ってきました(もちろん今も良い意味で苦は感じますが)。次のステップはこの学びを、今行っている研究に生かすことです。

最後に、趣味の読書で熱中していることは、「古事記」を読むことです。もちろん、現代語訳です。研修医の半年を大阪で過ごし、その時に、初めて古事記を読みました。そして、仁徳天皇御陵、伊勢神宮、出雲大社、橿原神宮、大神神社、春日大社、京都御所、などなど様々な場所を訪れました。日本人のルーツ、アイデンティティが古事記には詰まっていて、何とも言えない感動があり、何回読んだか覚えていないほど読んでいます。ですが、全く飽きません。むしろ、もっと知りたいと感じ、今は、日本書紀、地元長野・善光寺の歴史書を読んで勉強しております。

大学院にいる今、診療、研究、趣味、学べることはたくさんありそうです。そして「大学院にいました」という時に、何を学んでいるか楽しみです。